優秀賞
（一般の部）

「不思議な音から生まれた喜び」

倉内　朗子

柳田先生にお手紙を書くのは、これが二度目です。昨年お腹の中にいた赤ちゃんは、現在八カ月を過ぎ、つかまり立ちを始めてますます目が離せなくなりました。

絵本は言葉の意味が分かり始めた頃から手に取るものだとばかり思っていた私ですが、マタニティの時から読み聞かせをしてもいいんですよという先生のお言葉を知り、生後二か月の頃から赤ちゃん絵本を読んで聞かせるようになりました。最初に読み聞かせの楽しさを知ったのは、「もけらもけら」という作品でした。「もけらもけら、でけでけ」。こう始まるこの絵本は、「てぺぱて」、「じょわらんじょわらん」など、最初から最後まで、擬態語とも擬音語ともつかないような不思議な音だけが出てきます。そして、それらの音たちを彩るのもまた、模様とも絵ともつかないような不思議な形とたくさんの色だけです。

大人が読むと一分足らずで終わってしまうような、音と形だけの赤ちゃん絵本。これを読んで意味はあるのだろうか・・。半信半疑のまま読み始めてビックリしました。娘がケラケラと声を出して笑ったのです。そんな娘の様子を見て私まで面白くなり、音のイメージから声を弾ませてみたり潜めてみたり、真っ黒の絵のページではおどろおどろしく読んでみたりと、時間をたっぷりとかけて読

み聞かせました。そして気づけば二人で顔を見合わせて笑っていたのです。ああ、読み聞かせの楽しさってこれなんだな、と思いました。二人で一緒の音を聞いて絵を見てページをめくって目と目を合わせる。言葉を話せない娘の感情が確かに伝わり、心が通じ合った気がしました。

この絵本の文を書いた山下洋輔さんは、ジャズピアニストなのだそうです。なるほど、まさに音を楽しむ絵本だったのですね。初めて聞く音のはずなのに、読んでいるうちに意味が感じられてくるのが不思議でした。けれど考えてみたら、赤ちゃんにとっては全ての言葉が初めて聞く音です。世界中のどんな赤ちゃんも、何もない真っ新な状態からスタートして、少しずつ言葉を獲得し、彼らの世界を広げていくのです。そう思うと、不思議な音に触れて笑う娘の体験が、彼女の人生を彩るとても貴重で素敵なことのように思えました。

今では娘は絵本が大好きで、自分から手を伸ばして絵に触れようとしたり、嬉しそうに笑ったり、時には舐め舐めして紙の感触を味わったりしています。二〇二〇年は思いがけない困難に見舞われ、世界がどんよりとしていた一年でしたが、いつでも静かに寄り添ってくれる絵本に助けられ、何とか無事に新米ママの一年目を終えられそうです。

柳田邦男先生からのメッセージ

倉内さんは、昨年お腹に七か月の赤ちゃんがいるときに、おたよりをくださいましたね。そのおたよりでは、これから生まれてくる子にどのような絵本を読んであげようかと、あれこれ思いをめぐ

らせるなかで、自分が幼かった頃に、いちばん好きだった『からすのパンやさん』をめぐる思い出を楽しく書いていたのを覚えています。

その赤ちゃんが、元気に生まれて、はや八か月になったとのこと。しかも生後二か月から読み聞かせを始めたのですね。赤ちゃんがお腹にいるうちから読み聞かせの心の準備をしていただけあって、読み聞かせをするのを自分も全身で楽しんでいる様子が伝わってきます。そういうお母さんの心をはずませている表情や声のトーンは、赤ちゃんに伝わるのです。『もけらもけら』という、ジャパニーズピアニストの山下洋輔さんが文を書いたへんてこりんなオノマトペばかりが出てくる絵本に、まだ言葉を話せない赤ちゃんが、お母さんと顔を見合わせてケラケラと声を出して笑うということに、私はとても感動しました。

生後数か月しか経っていない赤ちゃんが、このように感情をはっきりと表現するのは、お母さんが全身で楽しんでいて、赤ちゃんの目をしっかり見ているからです。赤ちゃんは生まれるとへその緒を切られますが、まだ独立した人格が形成されたわけではありません。母子精神保健の専門家である渡辺久子先生（元慶応大学医学部小児科講師）は、「赤ちゃんは生まれるとすぐにへその緒を切られますが、“心のへその緒”は三歳まで母親とつながっているのです。」と言います。言葉によるコミュニケーションはまだできなくても、感情のコミュニケーションは濃密なのです。しかもお母さんとの喜びや楽しみの感情の共有は、赤ちゃんの心の発達に大きくプラスにはたらくのです。

ちなみに、DV環境にさらされた赤ちゃんは、生後十か月たっても、喜怒哀楽の感情表現がなく、顔は蝋人形のようになっているという研究報告があります。

倉内さんが、おたよりのなかで、「不思議な音に触れて笑う娘の体験が、彼女の人生を彩るとても貴重で素敵なことのように思えました」と書いているのは、とても大事な気づきだと思います。

「新米ママ」と自称する倉内さんが、コロナ禍のなかでキリキリすることなく、「静かに寄り添ってくれる絵本」を媒体にして、赤ちゃんと楽しく過ごし、前向きに生きているライフスタイルは、広く多くの親たちに知ってほしいです。